

英語外部試験利用自己推薦入学試験

試験科目（小論文） 問題用紙

以下は日本経済研究センターホームページに 2014 年 8 月 14 日に掲載された文章（一部改変）である。競争と協調の両立する社会についての筆者の意見をまとめ、達成のための方策について自分の意見を 1,200 字以内で論述しなさい。

私たちは市場競争の社会に生きている。消費者としては、より安く、優れた製品を選ぶのは自然だ。消費者としてみれば、生産者の間で厳しい競争があればあるほど望ましい。製品やサービスを供給する側が、競争を通じて切磋琢磨してくれることは、私たち消費者にとって、ありがたいことは明白だ。

それにも関わらず、競争社会と聞くと、何かとても悪いもののように私たちは感じてしまうのではないだろうか。できることなら、競争はない方がいい、となんとなく思ってしまう。それは、私たちが競争をさせられるという供給者の立場に立って考えてしまうからだろう。競争があれば、競争に直面している生産者は、いつも油断することはできない。競争相手が誰もいなければ、少しぐらい手を抜いても大丈夫だ。生産者にとって、利益を最大にする方法は、競争相手がいない状況を作り出すことだ。誰にもまねできない技術で製品を作る。他の競争相手は入ってこれられないような環境を作り出す。労働者にとっても同じで、必要とされる職種であって競争相手が少ないほど、私たちは高い所得が得られる。

できれば自分は競争には巻き込まれたくないにも関わらず、競争社会が支持されるには、いくつかの条件が必要だろう。中でも、競争に参加する機会が均等に与えられていること、努力すれば競争に勝つ可能性が高くなることは大事だろう。いくら努力してもコネや運で結果のほとんどが決まるのであれば、本当の競争にはなっていない。能力があっても競争に参加することができないのであれば、やはり公正な競争ではない。

競争社会を支持するからといって、私たちは足の引っ張り合いをしているわけではない。困った時お互いに助け合うという互恵的な社会規範があれば、逆に安心して競争に打ち込めるかもしれない。そのような社会規範は、家庭だけではなく社会全体で広まらないとなかなかうまく機能しない。誰もがお互い様であって助け合うような社会であるためには、世の中の人々が間接互恵性という規範をもっている必要がある。

では、どうすればそのような信頼感や互恵性についての社会規範を広めることができるだろうか。一つの方法は学校教育である。Algan, Cahuc and Shleifer(2013)によれば、学校教育においてグループ学習を取り入れているほど、協力することを重視し、他人を信頼するようになるという。競争よりも協力を重視する教育の一番極端なものは、様々な成績の順位をつけないというものだろう。日本でも運動会で順位が明確になる徒競走を種目に入れないと、仮に徒競走をしても順位をあえて付けない、極端な場合は手をつないで全員一緒にゴールするというようなことをした小学校もあった。そういう教育慣行を小学校で受けた人たちは、競争を嫌い、互恵的になったのだろうか。Ito, Kubota and Ohtake(2014)の分析結果は衝撃的だ。反競争的な教育を受けた人たちは、利他性が低く、協力を否定的で、互恵的ではないがやられたらやり返すという価値観を持つ傾向が高く、再分配政策にも否定的な可能性が高い。おそらく教育が意図したことと全く逆の結果になっているのではないだろうか。

競争による差を見えなくする教育の思想の背景を指摘した荻谷(1995)の議論を読めば、その謎は解けそう。平等主義教育と聞くと「手をつないでゴールへ駆け込む運動会の徒競走シーン」をイメージするが、その背後にある考え方として「学力差を生まれながらの素質の違いとは見なさず、生得的能力においては決定的ともいえる差異がないという能力間、平等感を基礎としている」のだ。「このように能力＝素質決定論を否定する能力＝平等主義は、結果として努力主義を広め、『生まれ』によらずだれにも教育において成功できるチャンスが与えられていることを強調した。・・・(中略)・・・教育における競争を否定する一方で、皮肉にも、能力主義教育を批判する議論が、教育における競争に人々を先導する役割を果たしたのだ。」と、荻谷(1995)は平等主義で反競争的な教育が逆に教育における競争を激化させたという皮肉な結果をもたらしたと指摘している。

反競争主義的で協力をもたらそうと考えた教育が、能力が同じという思想となって伝わると、能力が同じなのだから、所得が低い人は怠けているからだという発想につながったのではないだろうか。能力が同じなら、助け合う必要もない、所得再分配も必要がない、ということになってしまったのではないだろうか。やり方を少し間違えると、教育は意図したものとは異なる価値観を子どもたちに与えてしまうかもしれない。競争と助け合いの両方が大切だという価値観をうまく伝えていく必要がある。